

## 堤中納言物語『虫めづる姫君』確認テスト 解答・解説

### ■ 解答・解説

問1 並ひととおりでない／普通とは違って格別な（さま）。「なべて」は「総じて・普通」の意の副詞で、「なべてならず」で「普通でない・並々でない」。

問2 (例) この姫君がおっしゃることには。「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語で「おっしゃる」と訳す。

問3 終止形「めづ（愛づ）」。意味＝かわいがる・賞美する・心ひかれて愛する。ダ行下二段活用。

問4 (例) 世間の人々が、花よ蝶よともてはやし愛するのは、浅はかですまらないことだ。…姫君は、表面的な美しさを愛する世間の風潮を「はかなくあやし」と否定的にとらえている。

問5 (a) 終止形「はかなし」。形容詞ク活用。(b) 直前に係助詞「こそ」があり、その結びとして文末（ここでは形容詞の活用語尾）が已然形になっている。いわゆる係り結びの法則による（こそ→已然形）。

問6 心の趣・心ばえが趣深い（風情がある）。「心ばへ」＝心の趣・性質、「をかし」＝趣がある・心ひかれる。

問7 イ・ウ。「をかし（趣深い）」「心にくし（奥ゆかしい）」は姫君がよいと評価して用いている。「あやし（つまらない）」「わろし（よくない）」はマイナスの評価。

問8 (例) 物事は本来の真の姿を見きわめてこそ趣深いと考えるから。…姫君は見た目の美しさより「まこと（真実）」「本地（本来の姿）」を重んじ、変態する毛虫にこそ生命の本質を見て心ひかれている。

問9 終止形「心にくし」。意味＝イ 奥ゆかしく心ひかれる。「心にくし」は、奥ゆかしい・心がひかれて慕わしい、の意。「憎い」という現代語とは異なるので注意。

問10 (a) 終止形「おづ（怖づ）」。おそれる・こわがるの意のダ行上二段動詞。(b) (例) (侍女たちは虫を)こわがってうろたえたので。「おぢ惑ふ」＝おそれてうろたえる。

問11 姫君の動作に対する敬語。敬語の種類＝尊敬語。「召し寄す」の「召し」は「呼ぶ」の尊敬語で、身分の高い姫君が（童を）お呼び寄せになる動作を高めている。

問12 (a) 尊敬語（補助動詞「給ふ」、ハ行四段）。(b) 動作の主体である姫君に対する敬意。「興じ給ふ」＝（姫君が）おもしろがりなさる。

問13 (例) 眉をまったくお抜きにならない。「さらに……ず」は「まったく（少しも）……ない」と訳す陳述（呼応）の副詞。「たまは（給は）ず」は尊敬の補助動詞＋打消で「お……にならない」。

問14 (例) お齒黒や眉づくりといった、自然のままの姿に手を加えてとりつくろう人工的な化粧を、わざとらしく見苦しいものとして嫌っている。「人はすべて、つくろふところあるはわろし」という考えに基づく。

問15 (例) 侍女たちは虫を「おぢ惑ひ」、すなわちこわがってうろたえた。姫君とは正反対に、虫を気味悪がっている。

**問16** 「男の童」(または「ものおぢせ／いふかひなき(者)」も可。設問の十字以内としては「男の童」が最適)。身分が低く、虫をこわがらない少年を呼び寄せた。

---

**問17** 係り結び(係り結びの法則)。係助詞「こそ」を受けて、結びの語が已然形(あやしけれ・をかしけれ・心にくけれ)になっている。

---

**問18** イ。姫君はお齒黒や眉づくりを「うるさし、きたなし」「つくろふところあるはわろし」として嫌った。ア・エは内容と逆(毛虫を愛し、並々でない人物)。ウは侍女が虫をこわがった点と矛盾。

---

**問19** イ 複数の短編からなる物語集。『堤中納言物語』は十編ほどの短編を集めた、現存最古級の短編物語集とされる。

---

**問20** (例) 蝶を愛する「ふつうの」姫君と対比することで、世間の美意識にとらわれず物事の本質を見ようとする「虫めづる姫君」の個性・型破りさが際立っている。

---

**問21** (a) かしづく＝大切に育てる・後見して大事に世話をする。(b) あやし＝不思議だ／ここでは「(道理に合わず) つまらない・妙だ」。(c) をかし＝趣がある・心ひかれる。(d) わろし＝よくない・好ましくない(「悪し(あし)」ほど強くない)。

---

**問22** (例) 世間の美意識に従わず、毛虫など虫を愛し、化粧を嫌って自然のままの本当の姿を尊び、物事の本質を見きわめようとする、型破りで好奇心の強い姫君。

---